



步級猿七部集 上



利5
3473
1



利 5
3473
1-3

全部三冊

枇杷園士朗七部集

中津合刻



續士朗七部集はあも
士朗のまゝたふれりといふも何
程に申ふも士朗の名は世に超
出留はをまへかゝたにこのく冠
をまゝ物も程もなみむ人く

作者の姓名を論ずるに
名前の先をてててを
るは著者たる其序
号はるまゝに解て
あるに其
あるは著者たる
月居

飛と白とまの序と孫とま
連句の初稿も多し
あるに其
あるに其
あるに其
あるに其
あるに其
あるに其
あるに其
あるに其
あるに其
あるに其

喜もやうくく結くかちる涙よとひくこ
婦にねとる後都み垣種お接おすこと
らんくちる人のりよやうやうさうさう
花さく秋葉の空の影をたのむや後
くくおの結いうそあさささささ
こもほよよむ人の毒秋おまよ、申す
こもほよよむ人の毒秋おまよ、申す
け返のぬりおとて西の揚河はるま
長雷ふら金風と暮よさうはるさし深く

こねく桐栖う若きし士郎七部はけ
てゆくもくく西の七中ねとくく
結とくねら且の花み極楽をく煙と
たかかきく夕のりみちお日影をく
風情とくらの黄之葉を立すささて四
のよこけ飛とくくくくくくくく
むもくハ結く入もくけき天の
あささささささのよまの道とく
おの結くかの若きくの様あしてはるま

とるるもけ果らみく返り神りも
心もたふくちり同種も遊ん入りの
色も強もかしくあらしさく種も
極観よかめ門の由野そく文政四年
ふり月お果るあつらふりあつら
昔果るあつらふりあつら



三子居士合

三子居士合

上

名号一と題して亡人相えらひそら
お撰みおゆきせし何りそら一木犀
を評ふ日あるにけりそら一木艾
に其逢の安あり一故らそら一を
次くあるのせよおらそら一海邊
て朱樹の露そら一空のいけりそら
お案おもそらそら一ありそらそら

あらそらそら一おらそら

文化六己秋

春々卓池記
英 授

つこの國の鼻をうらや富士の山
五日の夜より十日みる
穀ゆふ月とすくれふまをひて
あや免の水を後と見えく
琴の結も心静ふ事ぬらん
人ふおれたも持よりふや
まらあ風をうらむは後しそ
明り肩ふけりも梅のま
小森はむ野辺ふ小門のえん
とあもうくあも遊のさしき
有るあきさのよとあそて後中ん

岳松士

輅朗兄輅朗兄輅朗兄輅朗兄輅朗

月あうとと残す
青ゆりろ起して見れば抄存
河計田の勢をうらむ早も
ハ平ふあうとと幸とかうり
ま久しも鳴離るふ矢も折
その花の深山星りて埋らん
碓壁の口と河けりも夕れ
三
松の白ぬるも勢田あも東て
二
松のきのぬあはむは
松のきのぬあはむは
唐ふはうりの大ふ合を賣

輅朗兄輅朗兄輅朗兄輅朗兄輅朗

五百年寺殿めて夜佛達
 温泉のくまも小橋かけて来る
 山鷲心鏡の底のぬけこころ
 みる後乃末の方の身もあきら
 てるやうい海人の袂をひらき
 出せぬの袂みとくよりハ
 晴風の月ひ起すまはら
 らる月ハ麻ふすころりて
 寝ん
 寝はく十後の波名の心
 白の
 赤穂粟穂をくわへり
 里人
 川音ふとくむ少なきと
 してて

朗兄輅朗兄輅朗兄輅朗兄

籠けぬの方とくまを白
 まくまの心をぬけぬの
 影たぐ
 念肩ひて出さきけく
 らき

朗兄輅

月より日経る久遠月あそむ山
 雪あり白くしるみくし夜
 菊拵枝尾をさす房の窓ありそ
 袴着るふりそりきぬがちりそり
 五人扶持きのみ付る牛の習
 中よりつらまふの事死むる
 うそは侍そとめてせられそ忘ま
 都をぬる海へ門水くそ
 兼りそ夏の浮橋あそびそ

松岳士

兄輅朗兄輅朗兄輅朗

君う紀念の小秋うれ輝
 会集り松子う付てあられこ
 つつは齧へし知漸の二ツ家
 思ひの喧嘩止るる旨の月
 芒のあめあつりれあそり
 き切の酒あめ髪の色きそ
 四のあつるるあそりうせ
 花あつるるあそりうせ
 雲あつるるあそりうせ
 雲あつるるあそりうせ

輅朗兄輅朗兄輅朗

下姓の舞の二丁けりゆえ
 けりまのあき握のあきく
 片吹西儀あ月うう
 後うらふ相ふつう
 陽うけのやあ靈まをさうが
 雲ふ又晴し山かうき流
 水を月も曇あをく文を
 象まうう和舞の浦浪
 舞うう協あ凡知付てやう
 種のみあうう園の戸
 古日の影あ双枝流てたうん

凡 朗 兄 輅 朗 兄 輅 朗 兄 輅 朗 兄 輅

神のまのうらハキ家ありまう
 四十あう二ワけくも凡のま
 胡嬢おるあ種く苗苗
 又ああ月澄つうまの氷
 体あうそそ体あうそも

輅 兄 朗 兄 輅

ねもふこのまふきえつふ二山
 地焼くつ海もこめ素
 残玉てとめてらうやう梅の香
 月月の門の香しき月
 雛のまねうまうまの鶴も
 かこめお抱うまわり獲うけ
 松肉のあはれうまうまやん
 くららうしと旨つこころの
 づ律のあはれとつとこ入つ

松 朗 兄 輪 朗 兄 輪 朗 兄 輪 朗 兄
 岳 士 松 朗 兄 輪 朗 兄 輪 朗 兄

伊人お中り歳ゆれもあは
 まひつるお救うまを誇りし
 玉の粉塵も新鳥の冠
 有ぬのひりて海の相うけ
 水きり流を林の山乃
 進しおよりて書きつる 師の流
 揚うまうりく 寺の船も
 大あはれほめをやうまはて
 暮るもあはれなう流さるの
 夢るも水一すらいむすいあけ
 人とあはれせうう 投引とあはく

兄 朗 兄 輪 朗 兄 輪 朗 兄 輪 朗 兄
 朗 兄 輪 朗 兄 輪 朗 兄 輪 朗 兄

三浦抄

上
六

あられ降るよえの葉音るよあ
霧のり方とくは林た
竹塔を眠る君もあられそ
月々半とら泣わんれせん
きりしは寝る片月とる
葉のよきよとるあ
おとまといぬるよ
まらあのお男ととる約
信りたはの板とあ
あきさし日のよ
あきさし日のよ

兄 輅 朗 兄 輅 朗 元 輅 朗 兄 輅

半 色 一 一 一 一 一 一 一 一
あまたあららつらん葉のはこ葉
葉のあはらん山吹うけく
あまたの葉とるよとるよ
神もあまたあまたあまた

輅 朗 兄 輅 朗

三日月

十一

白くしるしのうらみかたの二重の垣
 鳥翠
 さらさらやうらみかたの流のそ
 應亭
 びまわって十日のたけなりのむ
 松兄
 葉のそやこぼれしつらきうら
 六喜
 ちりむのかたあまの山に皆ぬ
 根上
 まる青く葉のそあの中や梅のむ
 松兄
 梅候き身お木うじと志きり
 糸菊
 糸の氷のそぬ流世やうらみのむ
 汝菊
 神まの霞うらみかたやうらみの果
 糸菊
 ねく山にけり流やうらみのそ

けささしるしの花のすくられけ
 天老
 陽の法想堂はむらむらき
 こ二

よみあけの春

月あけの外も月あきさき
 松兄
 花あきてけしむらみの帯
 糸菊
 りあけもあきさきさき山梅

き井

けささしるしのうらみかたの二重の垣
 鳥翠
 さらさらやうらみかたの流のそ
 應亭
 びまわって十日のたけなりのむ
 松兄
 葉のそやこぼれしつらきうら
 六喜
 ちりむのかたあまの山に皆ぬ
 根上
 まる青く葉のそあの中や梅のむ
 松兄
 梅候き身お木うじと志きり
 糸菊
 糸の氷のそぬ流世やうらみのむ
 汝菊
 神まの霞うらみかたやうらみの果
 糸菊
 ねく山にけり流やうらみのそ

三日月

十一

夢の小神はるらん孔ふる
 字らむすの月夜いん松菊
 もの果をちりてはこそ思道
 燕来より脱けとくはるま鞋が
 子雀の人あつくとそ名あふ
 大阜
 孔阜
 了國

ありとすくちたをせむ安れ
 松撰うまの世と字活山の
 のくまけとよく世はらるる
 もまあまれまをあら二とと
 びてこふ耳め跡とてまもつすれす

浦をさうおろし出らりあき次
 有ののさゆりかせよ子規
 松の月をゆきあられはるき
 立る守ま山松や空をわす
 掃人の何ふ是そはるま
 時多新の湖氷の月お分
 ちくさく初瀬の種人つく
 己う身あ縄引きまあ移る
 雀守もまての暑く板屋
 雪の留守まよう梅の峰
 くらひすの宿るる小あぶ
 松兄
 雲業
 黄山
 神見
 左雀
 八千坊
 三津人
 方明
 馮月

家内中 夢五ツ 濡りし 野秀
 うらゐす 夢果てらう 日人
 夢うあや 夢あ付 松兄
 娘子の尾のあはれ 山
 生約あま月うら 山
 棟りけあふ 翠川
 夜卯う 腹ふらして 五来
 水もあう まりあけ 鞍丸
 かんこき 夢と 共白
 園子も あうぬらう 竹堂
 孫六う 太刀の音や 松兄

青松葉 身あまや 夢千々
 まの山 の雪まき 夢の虫 五雄
 水もい 鼻もい 夢の海 卓池
 元日 かく 二百の面 丈左
 乃とこの 柳とま 猿 古猿
 まの海人 夢ま 暁 圃暁
 人日
 夢あはれ 上子 夢あ 素榮
 元日 夢あ 山 松兄

三浦山

山

蓬葉ふ若むら省の月日松兄

青柳を氷さしむる何、

雪を又迎へり、

鳥入や静白鶴赤の籠、

風中呼喚又よきて起、

そのつすれしを舟もろやま、

まるやみどかりふ来る暇、

腕候ふあれも入る法、

古くまらむるまきい、

やくそこの船をせ、

衣久短しと母のつら、

さみされや靴のぬけ、

あつあつや折くし拂、

輝あつや子供の落、

印の呼や傘さし、

清もうね鐘あつ、

人の扇申しとち、

永き日の波やとほ、

りまの地居つら、

膝あつれ月あつ、

光せぬと濁さし、

松兄

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

、

上十六

三

一

七

多摩川より伏見まで一里の産

四条納涼

くれり山あれこそ夕すま
 暮られて不破の雲を過り
 萩の風は何とゆれま
 旅人の萩 芒より衣
 萩の夢流の中より夕へり
 藤よりくれと栞りより世の夢
 揮るよおまろ懐ありた山家
 等々の花咲あふり今朝の秋

河洲 世竹 硯静 田禾 有磯 五寅 葵亭 松兄

夕の秋やきれてさびき城の夜
 今似も尻あそとゆれ砧うお
 遠里のあふらふもあうりり
 朝露中 拵あうりり 飯の上
 関川の橋よりうりり 秋の風

可都里 榊莊 暁浦

丁卯十月月 既平瑞花園の主人
 五打とむ久や 駢とあやよ
 みむとも 素樹の士朗白首の
 羅城一句井の桂五席足の岳輪
 花舞のやめあり 保ふつらあ

三

七

三好士命

三好

三好

み月や春をえしあしあきの
るはらうしむはまふかり温帯係
あつうちわつこま又由こ砂の中
うけうちや一松まきてはらん夏の日
まのやうにほくし又由る傘お新

蕉雨
東陽
梅間

路田の梅うけうち

梅あふまきほるを庭む湖池に

松兄

梅ほの池のきこ

お天まあしようて後まんのかお
まおましうけむとくう山のふ
くくゆのねとほり梅のけり
まうれふさうけりもあき波るが
まうしつ吹もおまおの風
木らうしお好りむけてり半の居
相六橋一様風のううりやち
小隅うしほ出すそのうあきのゆ
人アもうしむはくまきまをう
はらう三筋けりぬく梅うち
うしあうし月井井ん海叶

梅夫
李東
李臺
周瑞
桐拙
有斐
苦之
秋乱
砂文
松兄

三好

上

十九

三田生谷

三田生谷

社父傳、のふ婆光うてきのも
 庭むちりまや 湖水のささのふ
 ねらふまはるまふもねんてまきあは
 田中とてさうらうまの増えし
 宣紙と名をふ梳と甘るうり
 まらうまらうまを 橋の縁にま
 蝶の舞や 菊の把り 門ふふけ
 門さしふよふまけりり 足中
 信のいのねおほふたねま
 今をまをえさうして 田中の人
 赤い目いさうし 十五日あり

稻 剛
 菊 巴
 推 巳
 成 美
 左 琴
 布 無

又此より付いさうま 橋の縁うま
 朝夕の煙さうま 山家うま
 那委の事さうまより 画行御の事
 遠うまに 湖の舟さうま 出て
 徳根のまらうま さうま
 橋人の足めらうま いや 橋の事
 園うま 女中の所中の山うま 雲れ
 ねらふあうま
 所中の山さうま 雲れて 涼うま
 清さうまより 上ふらうま ねらめ 雲うま
 夕まの袂うま 雲うま 雲うま
 雲うま 雲うま

松 元
 雲 剛
 雲 剛

三田生谷

三田生谷

三海共俗

武陵

浦且

申すまや 燦々人 托てこころれあ
りまゝの 蟻何のりおめいそ
月お高 秋あふ是のあゝことそ
来つる 秋のまぬ日や庭のまゆり
親よるまゝのまゆりよ

武陵
浦且
中人
野高
九岳

ふまゝのまゆり
まゝのまゆり
つらまゝのまゆり
まゝのまゆり
まゝのまゆり
まゝのまゆり

松元

よゝ人のまゆり
大原あのみゆり
秋のまゆり
月の出りあまのまゆり
秋のまゆり
申す秋のまゆり
まゝのまゆり
申すまゆり
世のまゆり
まゝのまゆり

橘良
喜年
如非
希言

三海共俗

武陵

浦且

三
三

上
五

祥世の原甫君人の追慕乃
序ふまひりし

初付みまふ佛ふあう日る車
まゆられまはる松ハ静あり
油買へ埴賞へく原付みふ
純まの白磁ちよこは生海流が
雪ししとくを一日雪う陣
まうくくあきのよみぬおの
すのうき技おまう楯火が
炭のま巾うま出てる
清流ま水并流とくあうれ

松元 素月 松元 如高 大藤 麥河 不卜 松元

老いしはまひりしもなしてまきま

目くまの版いし味とまうれ
象飯赤豆版のまうまを味
阿りくく雪あうきとつま
花も凡不風情とまの山
事任不夏あう雪あうはと
のまはくまを

米ふー豆腐のあー不道の山
揚ハ飯ま龜ハ乱まうみ山
鳩揚まう仕血ハまの山
上六伴の鼻くく出たり様ま

水 汝 菖井 松元

三
三

三
三

三

三

瑞木園遊子秋の賀延又振うれて

年も名も涼しく加くはあうと

松兄

く名もはとこころも思ふのこ

桂五

松崎中乞喰志そあてたあうと

空阿

々々々々山月を眺めては併りあ

常梅

山松のあまふすことそまふあうと

松兄

垣立ふふや富のそまふあうと

復真

まの月まわうれてのこころも思ふ

松兄

月より名も来てぬすむ瓢が

一左

携るおまもつらて落る月の松

針央

とくくと福のねぬまのハてお

壺泊

四ツ辻中四五人まゝ二月月

松兄

何計くもや眉おまねくまの月

文曉

松のまふりふさねのまより後のそ

其成

まの月門田の序も足ゆると

下富

静るふまてこそあれおの月

湖凡

ふあくとさ月より携てふゆの月

渡雪廬

戸口くく若の涼花やまの月

蒼乳

湖のまうさよりまゆの月

五道

三

三

三

三
三

月子一五天の月の夜をてより
糸糸の流るゝと見えよ交の
葉のむのむののさびてき月
月ハよれをぬれぬそあめ
山と出く四五天のめさうり
何由へお人ハささささささ
あふゆ人とおささささささ
さささ中砂のささささささ
まきみ月むうーうえへてまき

双南
備史
かう女
大商
阿城
蛙聞
松元
岳酪
樽堂

世と世のまかりさうのあの方か
花の音ささささささささ
香殿をのほささささささ
家もさ凡の朝ひさき月
物中揃ふ葉の白の中ららん
満潮の味ささささささ

士朗
松元
岳酪
朗元
輅

扶衣吳國の垢を此の鏡に
 洗ふ三笠の山にけとくひ
 まうしの中お押命のみそまひ
 赤のひらくの聲、泣く、あけ
 あくけま身、宏ふ繪、待、候、み、て
 ろう、候、あ、き、の、よ、の、妙、候、と、注
 ろ、笛、の、あ、ま、り、き、人、と、恨、ま、つ
 五月の山に流るるく、ふ、繁
 龍、吟、中、お、柱、乃、朝、ほ、く、け
 昔のひらく、く、石、と、は、ま、り、色
 橋の心、赤、心、と、く、り、を、折、き、く

卓池
 五雄
 蕉雨
 秋風
 朗兄
 輅池
 雄池
 雨風

三
 暮み月、お、り、ま、ま、あ、り、ま、り
 野、入、る、野、田、の、町、家、の、種、の、都
 五、不、お、ま、と、賣、一、山、伏
 ま、お、上、お、か、さ、く、ま、ま、の、ち、き、候、ら
 人、ま、り、く、ま、湯、む、か、影
 打、入、る、指、と、琴、柱、み、ま、ま、り、候、ら
 ひ、く、ま、り、く、ま、ま、と、た、き、つ、く
 山、吹、り、枝、の、棟、と、中、化、し、ぬ、ん
 ひ、く、ま、り、候、ま、り、た、れ、の、月
 朝、鳥、の、ほ、り、芒、お、押、ひ、く、ま
 清、う、持、く、ま、り、波、や、き、こ、ろ、を

朗兄
 輅池
 雄池
 雨風
 朗兄
 輅池

三
宮
立
合

上

廿
四
廿
五

三
壺
北
合

三
上
廿
七

柔の煙ちりあき空あふくも
おさむくく 洗 折 ぬ 五
下 込 う ー ー ー ー 様 と 進 歩
日 初 う よ さ 小 田 一 舟 と や く
ま っ っ ち ち と み ち へ 氷 の み き
青 き ち ち ち ち 柳 ち ち ち
ち ち ち ち ち ち 鳥 も 娘 ー ー
ま ー ー ー ー ち ち ち ち ち ち

池 輅 兄 朗 氣 雨 雄

續
三
壺

三
壺
北
合

三
上
廿
七

續之枕集

續之枕集

逢中

申入

落馬して枕のたぐはきへり
おの後のともふ風杖をさる
撫順の三日とてかきき
枚葉津しきひるきうき
子の別る朝の果垣ふと
るあり端り心人橋よ

多人
岳路
素樂
乙堂
外

ほろしと枕のたぐはきへり
きり盛りの今五日あり
引控りきりし柳籠り
つらき強ひきり相控
うれゆの袖もきりし
ちうりおるふと大乗のあり
小角を著る月おきの志の
引板おるきりしきりし
何所も秋の衣れの消る
小坊のつれをひきりし
よきりのまむ持出むの群宜

入
堂
樂
入
外
樂
外
毛
如
樂

夜のまろふのうらぐらき
 苗代のゆりりきき池のえ
 証鼓の音のたへる中 吐
 奉納の糸絨えんきあはに込め 入
 まるくくひみ経とせてやる 棊
 夕鳥のし花の結縁と官の仕舞 入
 舟の消うこの小ままきくか 外
 己う名を明き人せうら任せ 外
 折れておろき後の志厚良 外
 骨入るう情き情き 外
 外

盤花あ月おと情じまのうら
 花のうらる市ありまあり 柳
 まり 柳あ又畑のなきとあり 希言
 望不うらうら尻の結縁と 左琴
 秋の目ああき 其静
 志ありのうらまのあお雪 年
 夏売の姿のあは花のあ 全
 打集りうらうのうら 静

コシ 斗入五

續多枕

上

續多枕

上

廿六

草人一
岳輅一
素染六
乙堂七
嵐外五
雲帯一
如毛一

吐丈一
抑莊一
希言一
左琴一
喜年三
共靜二

我湖

湖の水ようくさり 田塔とも
日におくろくうはむ湖の柄
福茶ふ衣文志まの月えしそ
教さう一のそは宿久の袴
常くお同りそえき昔の書
まゝ糸の凡のさきく麦の粉

湖雲

素染
雲
染
雲
染

續多枕

上

廿六

續巻初

お村分の細きぬらふおまきまき
名も忘れし一むきあり乃
葎の神衣の神も坊うあき
起る根をやはしくしとりの
つれおさハ今年越へき川の音
咲糸のとほるはの娘し
在りあり月とあうむる掃のけ
其まも咲寸 葎もあし
登もまきと魂ふと交秋のうら
まのしききてさうやれと刺る
状おの程も咲しき花のけ

雲、朶、雲、朶、雲、朶、雲

三

藤喰ふ世活あり疎る山吹
草、苗ふき根のまをまへたて
直うし門とぬき休む日
ましぬむれてまげさるる在
うらうらう因目とまほるらん
生涯ありよくれ素袍とま出
曉しとふ分列を 傍 目
次の百り村おおる六 斤 俵り
何んともつらぬ末と極ておく
おさしと八むし一の修て世とま
白きしと中 嵩 りとま

正阿雲、竹庵、其齡、万儀、鬼洞、中龍、子厚、阿上、雲

續巻初

止

三十一

續善抄

ちり佳きせいハ卯月の初月
にふときまゝせて二度別
いそぐしとくり中一と珠敷の敷
まも理屋のえまのあ 紫
あ中一とま何のりもあ紀切屋
あ波こ不にまあのまや
瘦揚のま鞋のとふゆり
あふふく中らまあ出たり

阿庵齡儀洞龍厚上

湖雲土

素染九
正阿二
竹庵二
共齡二
万儀二

鬼洞二
中龍二
子厚二
阿上二

續善抄

上

田家

素榮

一更の五馬の足は飽のつく
 垣見つじき 大根の 花 隆之
 種菜とわらうの帝のあま厚くて
 さゆつしきよも 條すゆる青
 吹うゆる凡のそりて月の秋
 牧野、約の名ふらうは
 之、榮 之、榮 之、榮 之、榮

うまのあふき匠やう乾母は
 出うらうらふ根つらうら
 体は日ハ程うけまらうら
 是へは病は人の何うそい
 とうらうらぬ時七孫子よとす
 墟うよれはやうらうらき
 月と花脱くおも今十月
 々影の純走ふ出に露の草
 能くぬら持病と又も思ふ切
 命さうらぬはあ月中一命さ
 とうらうらあま苗の青むまの青
 之、榮 之、榮 之、榮 之、榮

續纂林

續
素
葉
抄

一
三

三
 きけいばはこゝろぬ見の香
 時しおほくき花のうり松
 花をふらふき 撫と
 物毎ふ念仏忘る 陸もあ
 糸れおぢもさるちうらま
 妻ぬ人と志直のなま神たり
 侍も侍うらまは日めより上
 静なる隣をうらまはるこそ
 こゝろしおぬけり 歎ほり
 まこと越へぬとくして涙を
 起さずともう 能藤入りり

田 年
 松 乙
 柴 乙
 年 乙
 年 乙
 年 乙

夕月初暑さししの程をく
 換てぬ秋の烟午 止めさ
 是やさしき雲のや 織者 務
 物くるれい 彩のさあま
 何さふたしぬ工まの行と
 空のくく人て 刺さる香
 きの曲のふさ南 吹さし
 雲の氷ぬぬる 舟下 終

葉 乙
 年 乙
 年 乙
 年 乙
 年 乙

素葉 三

續
素
葉
抄

隆之九

上

隆之九
田年五
松乙五
竹齋四

所思

乞食して起るき極か
多をいふ人の意く葉の白
まろぬみ輝の白いの吹消る
曉のさうみの日申さうるり
雲のそくくく月のお雨
近人これう怒る 鶴

平入

入 入 入 入 入

上

上

續集
卷初

唯子の月の比より流れきり
いづも志のちやいと花さく
奇立白お木模の凡のいこれま
身の軽くもあう盤のうのま
そとられもまの上をいれそ外
せとくはほくしあ明のあ
昼の花今もあるくま
現とたよ少身喰あく

人 人 人 人 人 人

コシ
年入九
素葉六
若人九

續集

卷初

十一

續
蘇
氏

雛のみの根分と侍人菊の苗
 くのりししとやうなと帰陸
 壇子のるふ海にけり山あぶ
 くのりすとやうな入る陸う車
 大和侍の飯ふりして既
 勝おちや一登あがりて
 疾くもあき物の林の
 暗く心のさうましく
 田のさうの血五ねるきりぬ御月
 まるお夜の月あけしき芥田か
 移らぬ陸のさうまきり
 芥田か
 義車
 友國
 借史
 護物
 買月
 柯曉
 年眉
 岳毒
 天々
 柳莊
 哉也

青海若をたけけり芥の葉うあ、
 つのりあいの葉の葉りもさうま
 まるお海へあられ申りり
 身みこけとやうな出る
 田か
 東水
 柏翠
 祥禾
 旧人
 斤依
 木鶏
 青祭

續
蘇
氏

二

二

續
...

撲ふあひのう蕙の遠入、度うあ
 蕙来てて双々を愛うまを 韃 蘭 阜
 帰らう、又ひし清る末の芳か
 夜の原ととけりお花の葉とわく
 猫の息をうまをうらうてを 素 統
 啼やうてうらうまを猫の啼 太 年
 我猫のひりりあうらあうら
 昔如や日わ又あまうまを 三 彌
 うらうあまのちれつ花 半 古
 その戸の香先早ばてお 半 古

一之
 蘭阜
 三生
 標堂
 素統
 了國
 三彌
 半古

大さや栂の曙おーい
 末丸の花何やあくおれもま
 おまれもよかり万そ末丸の花
 藪八の勢もつ針よ栂の香
 ひく汲あつれて長閑さ清うか
 大松の脱おまをうらうてを 方 三
 かんころる葎の葉をみ味うら
 ひまややけんもも 葎 池
 ひ春とうらあをうらうてを 東 有
 ゆくまやあまの白の嬌 晋 莪
 まやかり雪をうらうてを 玉 屑

雄尼
 南雄
 文角
 一茶
 方三
 方三
 方三
 葎池
 東有
 晋莪
 玉屑

續
...

...

...

續
三

上
四

むく山おはるのついでまきまきぬ カ眉山

ちうほくと麻の情をゆき カ魚卵

子信らふ言おうれて衣 カ羅風

七まよとや カ郁賀

おまよりもきみ カ長翠

憲む カ葵亭

卯み カ襟間

弁み カ九淵

多 カ鹿太

孫 カ石鳥

小鳥のい カ路川

草 カ草

花 カ玉峨

花 カ甘谷

草 カ子

采 カ見

家 カ焚市

園 カ若翁

よく カ麥茂

阿 カ与

月 カ山人

月 カ黄山

續
三

上
四

怪し〜もあくてまゝぬきまゝなり
 月夜半のつらきお宿のうら〜お花
 月夜半のつらきお宿のうら〜お花
 怪し〜のまゝてお〜ぬ〜のた
 ぐ〜一〜と〜の延とてま〜ん
 尾不津麻のまのまづ名おいよ〜
 茹ふ〜もま〜お〜お〜
 くのま〜お〜お〜お〜
 情 船のや〜お〜お〜
 標のの偶のぬ〜〜〜
 巴江

文 嘯
 蕉 雨
 如 毛
 太 嶺
 對 竹
 白 夜
 成 美
 大 凍
 飄 風
 十 周
 巴 江

ま〜り〜と〜り〜り〜
 半あ〜ぬお〜と〜〜おの〜おや
 杉屋の〜お〜お〜
 山屋の〜お〜お〜
 二夜月〜お〜お〜
 ち〜お〜お〜お〜
 時を〜お〜お〜
 き〜お〜お〜お〜
 音を〜お〜お〜
 日〜お〜お〜お〜

荒 外
 吐 犬
 百 非
 六 壺
 仙 凡
 喜 年
 棋 人
 松 乙
 丹 以
 素 園
 于 當

續孫林

上野

其五子中智の程とて此とあり
 こころしとおふおほく程か
 故帳を志とてこい直之ハるる
 故帳を志とて程とてハるる
 聖五人の目とてふくくく
 清葉生やふふくくく
 石ね安きあの咲くわくく
 友の程とてふくくく
 友のおや等とて削す暮
 山氷の厚くくくく
 ろの程とてふくくく

平 亞碩
 コレ 巢兆
 大カ 奇淵
 大カ 采葛
 正阿
 魚洋
 カヒ 雀堂
 ヨク 東厚
 大カ 春人

弦石ふとくくくか
 炭のあのとくくく
 雪みねとて横ふあうく
 雪籠やと出とて百太の花二
 ぬくくくく海士うくく
 夕白や雪のくくく
 花ほくくくくく
 何れかくくくく
 善ふくくく花の目くく
 井極くく月くくく

尺艾
 東雲
 吞鳥
 鷺白
 空阿
 北尼
 澧水
 虎杖
 蓬松
 双蛇
 月巢

續孫林

上野

續集抄

上 早五

櫻の香の春ふ入甲五つる下有圭
 枯葦の類ふの脚多交神未万俣
 灯の心も頼りぬ店未の涼も千崖
 涼ささ夕鳥の光引けり上竹庵
 涼さと抱あけて並流万山許友
 すーさおや世を流しくぬまき三呂利
 磯の響泡吹ちる浪早う車未古周
 早ーとて麻とつるむや末の屋未宗有
 流えへま情ふかましく二階三岱李
 白るのまけてまおの料理三秋拳
 夕まのあこりや吹中とや所の葉三斗管

まましく夕まかれこそまおあれ三硯静
 白蓮の一編さかぬ稿の中三杭溪
 交神馬松と照る日の白ら三杜口
 水うさみんさぬけり雪の端三可都里
 みまきしく夕まの穂ふ出さ三中竜
 夕の影の杖甚の使のまらり三左
 夕人のまらり三天朗
 夕年やまらり三菜便
 相のまらり三天存
 夕あし秋の夕三夷唄

續集抄

上 早五

續 蘇 栞

上

四 十 六

秋まぬとせむえぬ故情の記心
 白く秋の白くや時め松
 夕の光初より遠くまゝの居
 秋のまゝの
 唐糸の衣とふくや 星の音
 七のあふふ人さなり浅草
 星の光とあけなみ文
 星の音宿の故に別れり
 折しる中星の波りの花をき
 香の香のあふまゝの
 かゝるやと折はるるの月
 梅香都 寒屋 少女 若丸 真貫 千阿 希言 雪常 物成 日雨 何又

人... 梅香都
 魂柳をふめて... 寒屋
 花... 少女
 花やう秋あり... 若丸
 朝... 真貫
 朝... 千阿
 朝... 希言
 朝... 雪常
 朝... 物成
 朝... 日雨
 朝... 何又

續 蘇 栞

上

四 十 六

一 中のおちきり 都あつひかり 芳之
 早やおちきり 宿たぬ取も 乙丸
 一 宿のあはさり 三日 大阜
 甲日月さうり たりさうん 素明
 春のさうり 人もあつひ 月おひ 号未
 常夏知や せもさうり 春堂
 流くも 宿の約や 林いさみ 如陸
 花は 葉も 宿のさうり 垣九
 宿のさうり 宿のさうり 牛里
 末のさうり 宿のさうり 泰雄
 一 宿のさうり 宿のさうり 綾彦

おまふらな 舞うらな 寺のあ 一作
 おまふらな 舞うらな 寺のあ 一作
 別れも 宿のさうり 宿のさうり 菓居
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 秀山
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 而蘭
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 梅價
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 阿彦
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 十影
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 乙堂
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 其齡
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 関望
 宿のさうり 宿のさうり 宿のさうり 鳥頂

漢書

上

一季ハギととも花あり菊のふ
 菊のふやひりひのとりれ負
 ふさくやうまのま韃のまは止
 せうしやまのうけもまの菊
 振雲のせや夜まの味の杖
 漢つけりるも物喰ひはまふ
 新しや鳥のまの川の上
 まの韃のまのつよ木まの河魚
 まのや終ふ時のほちうれ
 却しうれ松の朧まをまふり
 るるくや大群け何あれまの
 可盈 史方 巴四 關亭 青以 茂良 會 一 會 厚丸 何續 北

うけぬけまのまの移廣の何るが
 赤云の噂も若むまを志うれう車
 をくらんれまのまのまの火櫃が
 山ま花のぬくまの持ま日まのぬ
 山ま花のちまのちまのまのまの
 博みまのぬれてまのり 杉まの
 赤のまのまのまのちまのまのまの
 まのまの初まのまのぬ 枯まのまの
 飯けやまのまのまのハ梅のまの
 地まのまのまの火由まのまの海のまの
 橋人のまのまのまのまのまの
 麥太 北如 南江 路宅 元 不外 蓬宇 隣霞 菊也 太節 山川

漢書

上

編纂

冬の日とてあは垣の梅りとき
 色取ときのみ越々小まらうれ
 うちしと相の実焦を小まらうれ
 志もしと美う門うき山さうか
 梅人のさう中き青き小まらうれ
 松うけやうと桔梗の列き色
 妻のひも中と生て結上綱代ち
 つうととと尾のちりの十ねが
 妻う村と果登あまのり日新うま
 新の来きう喰うおのらと産多
 少うしとや文食時の中ちす
 梅 夜来 浦人 物白 雉 豚 琴州 可考 山甫 左 結 蒼 帆 得 芝

風や淡あかり松ハ青くとも
 赤うくの中家とくしの方ちりり
 青くしと備のさつさぬちりり
 遠濱中目あもから泣きあま
 淡き中この大沼も鴨の水
 在り中流ふる丸森のちみちと
 野も初とととととととととと
 けとけあまをとととととととと
 あまみそしととととととととと
 ちとちまといとととととととと
 初とととととととととととと
 文郷 鹿古 千丈 布舟 釣翁 鹿野 玄娃 巢也 雄 高 三 夕

集

上 五二

續
松

犬吼る松やかふるも啼ちやり
その日と舞消しとちちり
啼つる鳥を枯松 弱 新 泉阿
松へおとすて流る人言が 三津人
菊の青あまも流る松へおとす 蘭吹
こゝろあふ心ほさるぬ松の 有是
叔とわめさる病も平之松の月 投雲
納夏さる平佛心動くまの松 北俱
さる菊の牛あらるるも静るの 岐東
菊枯る松の静るまの松 帆江
根多遠ふとふ松より松尾松 芸門

上
五十一

枯尾松何よりより用ひ申さき 葛三
神松あまの松より 枯尾 七 蘆陽
ほつりんとつらつらぬ松の松 滄波
さる松の松の松の松の松の松 隆之
味あはれとさる松の松の松の松 八朶
持葉のよき世とさる松の松の松 米彦
淋しはさる松の松の松の松の松 岳輜
あまの松の松の松の松の松の松 風叟
あまの松の松の松の松の松の松 松夷
おしやと松の松の松の松の松 小泉
松の松の松の松の松の松の松 魯隱

續
松

上
五十二

續
松

繁並やいさかたてしこのすり衣 見二
多はされて老やそ入ぬ葉 食 龜白
訂のものともぬ枝のそさうふ 遊 人
枝の葉ももえぬそさうの 遊 人
却る帆のりよりききし 素 頌
そ人念佛にけすの門ふやうらり 素 頌
夕暮あり葉ふうしよききききき 素 頌
乾韮も葉も増賀の裸うふ 佳 友
うら韮も葉のりきききききき 佳 友
山あきと運く口みききききき 武 陵
寝て起るしよ帆のあの中梅の心 真 恒

道業の老いしゆありききき梅 天 老
すくすく平儀の厚く活々へる 巾 有
毛くくの嵐導きききききき 是 三
松樹も葉の名もきききききき 百 堂
大根も久ききききききききき 長 井
湖のあきききききききききき 大 蘇
我門の松もきききききききき 大 蘇
山川の流もきききききききき 有 途
以煙もきききききききききき 東 洞
ききききききききききききき 詠 帰
水風もきききききききききき 幸 角

續
松

山
三

由りりなく叔父の邊にありまるとし
けり年ト冬也小松皆も唐ありし
節季比の出口と在り戸口が
かさしと兼つじ年の中へ入る
けしてとてしあはれ年の暮
菩薩
雨
曉
山
騏六
菩雪

又化七とせり是の十日に終る
素原の唐よりとまらぬと集い

